

## 東京大学工学研究所

## 第7回定期講演會プログラム

日時 昭和25年11月9日(木), 10日(金)

場所 東京都目黒区駒馬町 856 東京大学工学研究所

○印は講演者, 講演時間はすべて10分, △印は幻燈有。

## 第1会場

第1日(11月9日, 木) 9-12時

開會の辞 所長 武藤俊之助

1-1. 赤外線吸収による迅速分析 倉谷健治。  
2 成分系, 3 成分系の分析を赤外線吸収の optical density の比をとることによつて, 全く秤量の操作をへずに行つた。

1-2. 自動記録比色計 ○磯部孝, 井上太郎, 久保田勝壽, 伊藤公四郎。標準, 試料両液層を通過し, 2 個の光電池に入る光の強度を偏光板により自動的に平衡させ, 液濃度を自記させる試作比色計の特性をのべる。

1-3. m- 及び p- クレゾールの迅速微量分析法  
○馬場宏明, 田村孝章。クレゾールをニトロソ化して発色せしめ, 自作の光電光度計を用いて着色度を測定することにより, m- 及び p- クレゾールの混合物を分析した。

1-4. 液状クロマトグラムによる微量定量 ○田村孝章, 馬場宏明, 石井信一, 安藤鋭郎。溶離液自動分割器と光電比色計の組合せからなる装置で種々の混合物を液状クロマトグラムにより分離定量する方法を行つた。

1-5. 窒素の極微量定量 ○岩井浩一, 西貝正明。通気管を用いるキェルダール窒素の簡易微量定量法に高周波容量分析法(C 型または L 型)その他を併用し極微量の定量を試みた。△

1-6. ペーパークロマトグラフを用いる有機元素定性分析の試み 安藤鋭郎, ○石井信一。有機化合物中に含まれるハロゲン, 窒素, 硫黄, 磷等の諸元素をペーパープロマトグラフ法によつて簡便にしかも微量で定性する試みを行つた。

1-7. 核酸の比色分析 鈴木堅之。ベックマンの

分光光度計および他の製作された光度計により, デソキシペントースおよびペントース核酸の比色分析について予備的研究を行い, そのスペクトルと, 吸収一濃度直線をえた。

1-8. アミノ酸類の N-ピクリル及び N-ジニトロフェニル誘導體 安藤鋭郎, ○橋本千恵子。クルペイン分子のアミノ末端のアミノ酸が何であるかをきめるために, 数種のアミノ酸類の表題誘導體をまず作つてその諸特性をしらべた。

1-9. クルペインの酵素分析 左右田徳郎, ○山崎誠, 安藤鋭郎。クルペイン硫酸塩を基質とし, 脾臓の蛋白分解酵素による酵素分解の模様を予備的にしらべた。

1-10. ヌクレオクルペインの若干の化学的性質  
○鈴木堅之, 北村とも子, 渡辺格。前講演会で報告した方法で精製したヌクレオクルペインの, 両成分への分離, その溶解, 沈澱性について興味ある事実を見出した。

1-11. テソキシペントース核酸の分子量の pH による変化について 磯晃二郎, ○渡辺格。鯨の白子より得たテソキシペントース核酸の拡散定数, 固有粘度を広い pH 範囲で測定し, 分子量分子形態の pH による変化を考察した。

1-12. 核酸と蛋白質の相互作用の研究(第1報, テソキシ核酸と血清蛋白の相互作用) ○宇井信生, 渡辺格。テソキシペントース核酸(鯨白子)と馬血清アルブミン, 馬正常血清との相互作用を pH 7.7,  $\mu=0.2$  の磷酸緩衝液中で電気泳動によつて研究した。

13時—16時

1-13. Kalousekの方法によるポーラログラフ電極反応の可逆性の決定 ○玉虫伶太, 田中信行。ポーラログラフにおける電極反応の可逆性を調べる一手段として提案された Kalousek の方法の大略を説明しかつそれを  $Ti^{4+}$  還元波, Ni-ロダニウム錯塩還元波に應